

第1章 問答の観点からの言語行為論

- § 1 発語内行為の分類
- § 2 質問の発語内行為の特殊性
- § 3 言語行為はなぜ成立するのか? (言語行為は、問答の中で成立することを論証したかったのですが、未完です。)

第2章 質問以外の言明は、問いに対する答として成立することの証明 (焦点論からの証明)

- § 1 コリングウッド・テーゼの説明
- § 2 「焦点」の観点からのCTの証明
- § 3 「焦点」の観点からのCTの証明の再説 (先週とは、全く異なる順序で証明をやり直す)

第3章 問答の同一指示テーゼ

- § 1 「問いへの答はすべて、同一性発話 (ないし非同一性発話) として理解できる」の証明
- § 2 補足疑問発話に関するT1aの証明
- § 3 決定疑問に関する証明
- § 4 残された問題
- § 5 次にすべきこと

以上が、②「問いに対するすべての答えは、同一性発話ないしその否定に言い換え可能である」の証明である。次にすべきことは、⑥「異なる同一性発話は、(異なる真理条件、主張可能性条件、使用法を持ち)異なる意味を持つ」の証明である。

第4章 相関質問が異なる時、発話の意味は異なる

テーゼ4「相関質問が異なる時、発話の意味は異なる」の証明が課題であった。

このテーゼは、次のプロセスで証明できる。

- ①すべての言明は、問いへの答えとして理解できる (上記テーゼ3)。
- ②問いへの答はすべて、同一性発話として理解できる。 (仮定。後で証明)
- ③すべての言明は、同一性発話として理解できる。 (①と②より)
- ④同一の文は、異なる問いへの答となりうる。 (上記テーゼ2の証明過程で指摘された)
- ⑤同一の文が、異なる問いへの答えである時、それは異なる同一性発話として理解できる。 (②と④より)
- ⑥異なる同一性発話は、(異なる真理条件、主張可能性条件、使用法を持ち)異なる意味を持つ。 (仮定。後で証明)
- ⑦相関質問が異なる時、発話の意味は異なる。 (⑤と⑥より)

第3章で②を証明したので、残るのは、⑥の証明である。

同じ文の発話であっても、質問が異なると焦点の位置が異なることは以前に述べた。

質問と返答は、同一性発話を構成するが、どのような同一性発話を構成するかは、焦点位置と関係している。

「相関質問が与えられれば、発話の焦点位置は決定する」の説明に用いた例をもう一度あげよう。

Q1: 誰が、昨日会議に来なかったのですか?

- A1: 彼が、昨日会議に来ませんでした。。
 Q2: 彼は、何時会議に来ませんでしたか？
 A2: 彼は、昨日会議に来ませんでした。。
 Q3: 彼は、昨日どこに来ませんでしたか？
 A3: 彼は、昨日会議に来ませんでした。
 Q4: 彼は、昨日会議、どうしましたか？
 A4: 彼は、昨日会議に来ませんでした。

前章で述べたように、質問は指示を求めており、答えはその指示を与えているので、完全な答えは、同一性発話となる。質問を除く発話は、全て質問への答えとして理解可能であり、質問への答えのは同一性発話としての理解可能であるので、すべての文は同一性発話として理解可能であることになる。全ての文の発話をこのような同一性文で表現したものを「完全文」と呼ぶことにする。それに従って上記を書き換えると次のようになる。

- Q1: 誰が、昨日会議に来なかったのですか？
 A1: 彼です。
 完全文1「彼＝昨日会議に来なかった者」
 Q2: 彼は、何時会議に来ませんでしたか？
 A2: 昨日です。
 完全文2「彼が会議に来なかったとき＝昨日」
 Q3: 彼は、昨日どこに来ませんでしたか？
 A3: 会議です。
 完全文3「彼が昨日来なかった場所＝会議」
 Q4: 彼は、昨日会議、どうしましたか。
 A4: 来ませんでした。
 完全文4「彼の昨日の会議へ対応＝欠席」

つまり相関質問によって答えの発話の焦点位置は異なるが、相関質問によって、完全な答えの同一性文もかわる。

この二つは対応しており、焦点の置かれる部分がそのまま、同一性発話の左辺ないし右辺となる。

- 完全文1「彼＝昨日会議に来なかった者」
 完全文2「彼が会議に来なかったとき＝昨日」
 完全文3「彼が昨日来なかった場所＝会議」
 完全文4「彼の昨日の会議へ対応＝欠席」

これらのT文を考えると、真理条件が異なることは明らかである。これらの主張可能性条件を考えても、そこで証明すべき論点は変わって来る。使用法について言えば、異なる相関質問に対する答えとして使用されるのであるから、使用法はことなる。これらの同一性文の意味が異なることは、明らかである。

以上で⑥を証明できた。そうするとテーゼ4は証明できる。

テーゼ1「(質問を除く)すべての発話は焦点を持つ」

テーゼ2「焦点の位置は、相関質問によってのみ決定する」(これは先週のテーゼ2と同じもの)

テーゼ1と2から、次のテーゼ3が帰結する。

テーゼ3「すべての発話は、相関質問を持つ」

テーゼ4「相関質問が異なる時、発話の意味は異なる」(これが先週のテーゼ1に対応するもの)

このテーゼ3とテーゼ4からCTが帰結する。

CT「(質問を除く)すべての発話の意味は、相関質問によってのみ決定する」

第5章 同一性発話の意味論

暫定的提案（文脈的定義）：同一性発話の意味を理解すること＝両辺の名詞句を理解し、それらの指示対象の同一性を理解すること

1、名詞句を理解するとはどういうことか

（1）名詞句の分類

- ・名詞句の分類1：指標詞、指示詞、固有名、一般名、確定記述句、
- ・名詞句の分類2：

単称名 Singular term: 「ソクラテス」「ソクラテスの妻」

一般名 General term: 一般名の例: 「リンゴ」「G8 加盟国」「水」

（2）単称名の理解について、Sinn と Bedeutung

フレーゲは、単称名（彼の言う「固有名」）について、その指示対象を **Bedeutung** とよび、指示対象の与えられ方を **Sinn** と呼んだ（Frege の論文「意義と意味について」）。

Bedeutung には日本語訳「意味」が使われており、**Sinn** には日本語訳「意義」が使われているが、紛らわしいので以下ではそれぞれ「指示対象」と「意味内容」と意識する。

同じ指示対象を持つ多くの名詞句があり、それらは異なる意味内容を持つ。しかし、意味内容を持つ名詞句が、指示対象を持つとはかぎらない。フレーゲは「地球から最も遠く離れている天体」という例をあげている（『フレーゲ哲学論集』藤村達雄訳、岩波書店、p. 35）。

フレーゲは、単称名の意味内容を「ものの与えられ方」（前掲書、p.34）と説明するが、これは心理的なイメージのようなものではない。「記号の意義は多くの人々の共有財産となりうるものであり、したがって個々の人間の心の部分でもなければ様態でもない。」（同書、37）これは表象ではない。「表象に関しては、厳密に言えば、それがいつ誰に属するかを付け加えねばならないのである」。そこで意味内容は、指示対象と表象の「中間に位置する」（38）と言われる。（37）フレーゲは、これを、月と望遠鏡の中の像と観察者の網膜像に例える（38）。

単称名についてのこの説明を認めると、単称名を理解するとは、単称名の意味内容か指示対象かその両方を理解することである。

（3）意味内容とは何か

ある単称名の意味内容が与えられ、その単称名に指示対象が存在するとしても、その対象にたどりつけるとはかぎらない。例えば、「ソクラテスの妻」や「私の自動車」の意味内容がわかっても、その対象にたどり着けるとは限らない。（実際、多くの質問は、このような場合に行なわれる。）このように単称確定記述句の意味を理解しても、対象に辿りつくことはできない場合がある。

このような場合にも、その意味内容を理解しているといえるのはなぜだろうか。

「ソクラテスの妻」の意味内容を理解するとはどういうことだろうか。

この場合にもし対象に辿りつかないとすると、それはなぜだろうか？何が足りないのか？
ところで。その意味内容だけから、対象にたどり着ける場合があるのだろうか。「最前列右端の車」はどうか。これなら、一つの対象にたどり着けるようにおもわれるがどうか？

(4) 指示対象の理解は可能か

指示対象を理解するとは、単称名による対象の指示を理解することである。これは、どのようにして成立するのだろうか。

指示は原理的に不確定であるという主張がある。

- ・クワインの「指示の不確定性」テーゼ

(2001年1学期第4回講義)

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/~irie/kougi/tokusyu/2001summer/2001ss04quine.htm>

- ・パットナムのレーベンハイム＝スコレムの定理による論証

(2001年1学期第5回講義)

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/~irie/kougi/tokusyu/2001summer/2001ss05quine.htm>

- ・デイヴィドソンの語による対象の「指示」への批判